①

里いも畑

さく　なかみのる

四年生になったヒロシたちは、今日の総合学習の日
学校の裏にある学校農園で、里いも作りを始めた。
でも、ヒロシや啓二たちは、
作業よりも初めての畑ではやわらかい土の上で
遊ぶほうが面白く、
作業を放り出し遊んでいた。
里いも作りを指導してくれるのは、
近くに住んでいるボランティアの農家の人で、
中浦作造というじいちゃんであった。
作造じいちゃんは遊んでると
「ほれ、畑は遊ぶとこじゃねえど」
といってしかるのだったが、
子どもたちは作造じいちゃんのいうことなんかき
かなかった。

②

今日も作造じいちゃんは、
ヒロシたちがふざけていると注意したが、
そのうち畑のまん中に急に座りこんでしまった。
担任の福田先生があわてて救急車を呼び、
作造じいちゃんを病院に運んでいった。
病院から帰ってきた福田先生の話では、
作造じいちゃんは
「心配いらねえ」
といっていたというが、
お医者さんの話では、次の総合学習の日までには、
退院できそうにないとのことだった。
ヒロシも啓二も自分たちのせいだと思った。
二人だけじゃない。
四年二組の全員がそう思った。

③

四年二組の次の総合学習の日になっても、
作造じいちゃんは退院してこなかった。
畑ではみんなだまったまま、静かに作業をしていた。
その日クラスで話し合って、
作造じいちゃんに手紙を出すことにした。
ヒロシも啓二もみんなと一緒に手紙を書いた。

何日かたつと、作造じいちゃんから返事がとどいた。

④

手紙にはこう書いてあった。

「里いもは土が乾くと育ちません。

だから、芽が出てきたら、

それをおおうようにわらをかけて、

乾かないようにしてください。

次に新しい肥料もやってください。

やり方は、福田先生に話してあります。

何よりも、

畑と里いもを大事にする気持ちを持ってください。

そうすれば、きっとおいしい里いもで、

手作り給食が食べられると思います」

⑤

作造じいちゃんがいうとおりに、
子どもたちは畑の手入れを続けました。
それからしばらくは、よい天気が続きました。
でも、それで気がゆるんだのか、
ヒロシたちは畑には行かなくなってしまったのです。
ある日、ヒロシと啓二は帰る前に、
学校の裏にある畑に行ってみた。
すると、わらが乾いて、
里いもの芽が少し黒くなっていた。
驚いて二人は校舎にもどり、
バケツで水を汲んで畑に持って行きました。
それを見た四年二組の仲間がやってきました。
そして次々と、バケツリレーで畑に水をやりました。

⑥

いつしかそれは、放課後の学校に残っていた
子どもたち全員のバケツリレーになりました。
福田先生も、そのリレーに入りました。
畑を大事にすること、里いもを作ること。
それがどんなに大変か、
ヒロシたちはバケツの重さを通して知りました。

⑦

それから何日かすると、
里いもの葉は元気に伸びてきました。
そのころになると、
ヒロシたちは必ず誰かが一日一回は裏の畑に行って
里いものようすを見ることになっていました。
里いもはぐんぐんと成長していきます。

⑧

暑い夏がやってきました。
夏休みも、四年二組の子どもたちは、
里いもが病気にならないように、
交代で畑を見守ることにしました。
里いもの葉が大きく成長して傘のようになってきました。
秋になったら収穫です。
みんなワクワクしながら待っていました。

⑨

畑に赤とんぼがやってきました。
秋です。
もうすぐ、里いもの収穫。
でも、ヒロシたちには気になることがあります。
そう、それは作造じいちゃんのこと。
あれからずっと作造じいちゃんは
入院したきりだったからです。

⑩

さあ、今日は里いもの収穫の日です。
朝からみんな大張りきりで畑に行きました。
そしてビックリ！
何とそこには作造じいちゃんがいたのです。
みんなはじいちゃんを囲んでいいました。
「いつ退院したの？」
「何で教えてくれなかったの？」
福田先生はニコニコ笑ってるだけです。
ヒロシも啓二も畑に転げ回って大喜びです。

⑪

「いただきま～す」
大きな声が教室に響きます。
今日はお母さんたちと一緒に作る、
手作り給食の日。
畑でとれた里いもがいっぱい入っている豚汁です。
作造じいちゃんも子どもたちと一緒に
おいしそうに食べています。
子どもたちの「おかわり～」の声が
教室の中に響きました。

⑫

夕方になりました。
学校の裏にある畑では、
作造じいちゃんが来年の四年生のために、
今から畑の準備です。

おわり